

ゾルゲ事件とタカクラ・テル

山野 晴雄

はじめに

タカクラ・テルがゾルゲ事件の関係で警視庁に自首したのは1942年7月のことであった。

ゾルゲ事件とは、ソ連赤軍情報局(第四部、GRU)に所属したドイツ人ジャーナリスト、リヒャルト・ゾルゲと朝日新聞退社後、第1次近衛文麿内閣の囑託としてブレーンとなった尾崎秀実を中心とした諜報活動が、太平洋戦争前夜の1941年10月に発覚した事件である。事件では、ゾルゲ、尾崎のほか、ドイツ人電信技師マックス・クラウゼン、アヴァス通信記者のユーゴスラビア人ブランコ・ブーケリッチ、カリフォルニアから帰国したアメリカ共産党員の日本人画家・宮城与徳の5人が中心メンバーとされた(加藤・2014)。

タカクラは、その中心メンバーの1人、宮城与徳と関係があり、タカクラに宮城を紹介したのは真栄田(松本)三益であった。

この真栄田をめぐって、牧瀬菊枝編『久津見房子の暦—明治社会主義からゾルゲ事件へ—』(思想の科学社、1975年)に掲載された「安田徳太郎氏聞き書き」の中で安田徳太郎が、①タカクラが真栄田を連れて安田を訪れたとき、真栄田が宮城は「コミンテルンと違った別の組織らしい」「警視庁はもう知っているらしい」と発言したこと、②そのことを安田がゾルゲ事件で検挙されたときに手記に書いたら、高橋警部が「いらんことを書くな」と破り捨てたこと、③タカクラが安田に、真栄田は「満洲での事件」で検挙されたとき「満洲での事件を助けてもらうために、警視庁のまだ知らない宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引きをし」と話したこと、などを明らかにした。これに対して松本三益は、1975年5月、「それは捏造による中傷が記述されており、名誉が傷つけられ、社会的道義の上からも許せない」として、取消と謝罪を要求する抗議文を安田ら関係者に送るとともに、守屋典郎を弁護人として名誉毀損の裁判を起こした。しかし、裁判が行われないうちに提訴は取り下げられ、守屋が、その経過と松本の抗議と釈明の内容を盛り込んだ『『聞き書き』と戦前史の真実—安田徳太郎氏のあやまりを正す!—』(『文化評論』1976年6月号)を公表し、安田の「聞き書き」は「信用できない」と反論して、裁判は行われずに幕を閉じた(渡部・2018、15～16ページ)(1)。この守屋論文に対して渡部富哉は、「安田徳太郎と松本三益の名誉毀損裁判をめぐって『聞き書き』と『戦前史の真実』を検証する」(『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』No.43、No.44、2015年)及び『解明されたゾルゲ事件の端緒—日本共産党元顧問真栄田(松本)三益の疑惑を追って—』(社会運動資料センター、2018年)で詳細に検討し、真栄田(松本)三益が宮城の諜報活動を当局に密告し、ゾルゲ事件の端緒となったことを指摘した(2)。

本稿では、タカクラ・テルの評伝研究の一環として、タカクラと宮城との出会いから自首するまでを跡づけるとともに、タカクラの証言とも関係する真栄田のゾルゲ事件をめぐる疑惑についても検討しておきたい。

1. 宮城与徳との出会い

沖縄出身の画家・宮城与徳とタカクラ・テルが知り合ったのは1935(昭和10)年5月ごろのことであった(3)。宮城と同じ沖縄出身の真栄田(松本)三益の紹介によるもので、東京市滝野川区(現・東京都北区)のタカクラの自宅に真栄田と宮城が訪ねて来たのである(4)。

宮城は、1918年に家族が移住したアメリカに渡り、カリフォルニアの美術学校を出て画家となった。沖縄出身者の多い黎明会や文化活動から共産党に接近し、31年秋に矢野某(豊田令助)の推薦でアメリカ共産党員になったとされる。32年末、矢野と「白人の男」から日本への帰国を指示され、さらにロイ(野坂参三)に指示されて実際に出発したのは33年9月であった。そして、10月に日本に入学、コミンテルンの仕事と信じて、ゾルゲや尾崎秀実とともに「東京ゾルゲ諜報団」の一員として活動していた(野本・1997、54頁・64～224頁、加藤・2014、141頁)。

真栄田は、1928年に共産党に入党(渡部・2018、107～118頁)、大阪で活動したあと、30年より農民運動に参加、32年1月、タカクラが長野県上田・小県地域の農民運動に関わり西塩田村小作争議を指導しているとき、守屋典郎とともに別所温泉を訪れており(守屋・1976、188頁)、旧知の間柄

であった。真栄田は、共産党農民部長が大泉兼蔵であった 32 年当時、守屋典郎らとともに農民部に所属し、全国農民組合全国会議派(全農全会派)オルグとして活動していたが、33 年 4 月に「農民闘争社事件」で検挙され、その後保釈されていた。

宮城は、33 年 10 月に横浜港に上陸した直後に沖縄師範学校時代の同窓生喜屋武保昌に連絡をとり、喜屋武宅に長期滞在し、真栄田夫妻もしばしば出入りしていたという(喜屋武・1998、21 頁)。

ゾルゲは、「日本の深部の力と日本の方向性を観察するキーポイント」として日本の農業問題を研究する重要性を認識し、農業・農民問題に詳しい人物を組織することを宮城に指示していた。そこで宮城は、喜屋武を通して真栄田を紹介されると、1935 年から 36 年にかけて、真栄田を通して農民運動関係者と接触したり、グループに組織したりした。宮城から農業問題に詳しい人物の紹介を依頼された真栄田はまず最初に、タカクラを紹介したのである(渡部・2017、37～38 頁)。

宮城の「訊問調書」(石堂編・1971、390～391 頁)によれば、宮城が真栄田とともにタカクラの自宅を訪問した際、タカクラとロシア文学や芸術などの話をしたことや、農村問題の研究指導をしてもらうことを約束したことが知られる。

その後、タカクラは、何度か同じ滝野川区の宮城の下宿先を訪ねたり、宮城がタカクラ宅を訪ねたりしている(5)。

タカクラによれば、宮城が、アメリカから帰った画家と言っていたことから、興味を持って会ったという。当時、滝野川で貧乏をしていた時代でもあり、「ごちそうしたいから」と言われてよばれ、「主婦の手でごちそうになった」。はじめは単なる絵描きだと言っていたのが、その後「思想的な話」になり、「ソ連のスパイ機関に参加してもらいたい」と言われた。しかし、タカクラは、宮城に信頼を置くことができず、断った。タカクラは、その理由を次のように述べている(タカクラ氏より聴取、1980 年 11 月 22 日)。

ソ連のスパイ機関に参加してもらいたいと言われた。しかし、私が見てみると、生活が乱れている。家にいる未亡人との関係が正しくないことがすぐにわかった。安田(注、安田徳太郎一引用者)のところにも近づいて行って、安田の話によると、梅毒などで治療を受けている。それほど重要な仕事をしている人が生活が乱れているのでは適当でない、と断りました。

宮城が結核の治療のためとして安田を訪れたことはよく知られているが、梅毒については知られていない。タカクラは、「宮城に対する信頼があれば、もっと深く結びついていたかもしれない」とも語っていたが、諜報活動する人間として信頼を寄せることができなかつたことから、宮城とは距離を置くようになっていった。

宮城は、真栄田からタカクラを紹介される前、35 年 1 月 14 日にタカクラの義兄に当たる安田徳太郎のもとを訪れていた。安田によれば、青山 1 丁目で喀血したという患者が入ってきて、診察したところ、右肺は肺結核に相当侵されていたが、進行は止まっていた。この患者が宮城で、その後 1 週間おきに来るようになったという(安田・1975、191 頁、安田・1976、240～241 頁)。

この安田のもとにタカクラが真栄田を連れて訪ねたことがある。35 年の 6～7 月ごろと思われる。そのときに真栄田は、宮城が「日本共産党のほかに、もう一つ別の非合法組織があり、「そのほうの人らしい」とし、「警視庁はもう知っているそうです」と語ったことを、安田は次のように述べている(安田・1976、244～245 頁)。

二・二六事件がおさまった三月中頃に(6)、高倉テルさんが真栄田三益を連れてやって来た。わたくしは真栄田の顔を見るなり、「君はひどい男だ。あんな警視庁のスパイをぼくに紹介したりして」と抗議したら、「ぼくは大泉という男は知らなかったのです。銀座を歩いていたら、あの男がぼくに日本共産党にはいれと言ったので、入党したのです。検挙されて、取調べのさい、あの男と対決になったので、大泉の顔を睨んで、こんな坊主は知らんと怒鳴ってやりましたら、大泉はだまって、うなだれました。それでおしまいでした」と、言いわけをした。「銀座で通りすがりの男にすすめられて、入党するなど、そんな入党の方法があるか」と言ったら、黙ってしまった。

それから、真栄田三益は話を逸らして、「このあいだ同郷人の宮城与徳という画家の家に、高倉さんといっしょに行って、本人手づくりの料理をご馳走になりました。その席上宮城君はあなたの

ことを褒めていました。一体どういう人なのでしょうか」とたずねた。わたくしは「肺結核でときどきわたくしのところへ診察にみえます。医者对患者の関係で、どういう人が知りません。人間としてはひじょうによい人です」と言った。そうしたら、真栄田三益は、「噂によると、日本共産党のほかに、もう一つ別の非合法組織があるそうで、どうもそのほうの人らしいです。警視庁はもう知っているそうです」と言った。そこでわたくしは、「わたくしは医者としてつきあっていますから、別にさしつかえありませんが、あなた方二人は腹を決めねばなりませんね」と言ったら、二人とも黙って帰ってしまいました。それから高倉さんは七年間わたくしの家に寄りつかなくなった(7)。

真栄田は、この安田の証言について、宮城の「仕事の内容など知っているわけがないから話すはずがない」と否定しているが(守屋・1976、191頁)、宮城が諜報活動をしていたことを知っていたから、宮城の依頼を受けてタカクラを紹介していたのである。その後真栄田は、大審院で懲役2年の判決を受け35年7月13日、千葉刑務所に下獄した。

宮城の「訊問調書」によれば、タカクラは、宮城との話の中で、会社工場などの俯瞰写真を撮る会社の事務員に知人がいるともらした。宮城は諜報活動の必要上、その友人を紹介してほしいと頼んだが、タカクラは、友人の紹介も、また、撮影した写真の入手もすることはなく、「次第に私(注、宮城—引用者)との接近を避ける」ようになったという(石堂編・1971、301頁)。

そしてタカクラは、自分の代わりに、真栄田が推薦していた久津見房子を宮城に紹介した。

久津見によれば、宮城が「だれか女の人で手伝ってくれる人はいないか」と言ったとき、真栄田は、1923年の大阪市電のストライキのときの久津見を知っていて、それで久津見を推薦したという(牧瀬・1975、108頁)。

タカクラと久津見とは、久津見が山本宣治との関係で安田を知り、安田の妹ツウがタカクラの妻であったことから、安田の家で知り合っていた(牧瀬・1975、107頁)。また、1935年には小菅刑務所に収監されていた高橋貞樹が腸結核で重体となったため、タカクラをはじめ山川均、西雅雄、浅沼稻次郎、三木清、安田徳太郎、久津見らが発起人となり、執行停止運動、義捐金募集をおこなっている間柄であった(高橋・1968、363～364頁、沖浦・2015、328～329頁)。

タカクラが宮城に久津見を紹介したときのことを、宮城は「訊問調書」で次のように供述している。

1936年2月7、8日ころ、タカクラが宮城のもとを訪れてきたとき、一緒に外出し、銀座方面を散歩していた途中、タカクラが「久津見房子が病気をして居るから見舞って行くから」と言って誘い、四谷区須賀町の久津見宅を訪問した。宮城は、初対面だったので、もっぱら2人の話を聞いていたが、久津見について「仲々しっかりして居る」ので「我々の仕事のために協力」してもらおうと考え、久津見と別れたあとタカクラに、久津見との再会を依頼した。

2、3日後、大塚駅に近い山海楼で宮城は、タカクラ、久津見と食事をした。タカクラは少し遅れて来たが、その間に宮城は、「自分はアメリカでプロレタリア芸術会の仕事をやって居た」ことや「コミンテルンからアメリカに派遣されて居る友達の見て来た山本懸蔵や片山潜の話」、「アメリカに於てプロ芸の絵画展覧会の時私が日本の左翼闘士三田村四郎、佐野学、鍋山貞親、徳田球一、丹野セツ等のスケッチを描いて売った話」などをして、「自分は日本の社会情勢の真相を知り度いから聞かして貰いたい」と話したという(石堂編・1971、391～393頁)。

ただ、久津見の回想によると、宮城との出会いは多少異なっている。久津見は、タカクラが宮城を紹介したときのことを、「久津見さん、こういう仕事をしませんか。宮城与徳君という大変いい青年がアメリカ共産党から来ているから、その人の仕事を手伝ってくれませんか」と誘われ、初めからコミンテルンの情報機関の仕事だ、とタカクラから言われたとし、「いったん情報機関ということ聞かされた以上、こっちは断れないでしょう。高倉さんはほとんど断らせないつもりだったんでしょう」と語っている(牧瀬編・1975、107頁、108～109頁)。

タカクラから宮城を紹介された久津見は、その後、安田の家を訪ね、宮城の諜報活動に関わることについて、安田に相談している。安田は、そのときのことを、次のように回想している(安田・1976、243～244頁)。

一九三六年(昭和十一年)二月に、久津見房子さんが、わたくしの家にみえて、「あなたのところへ宮城という絵描きさんが診察にみえていましょう」と言った。これにはドキンとしたが、久津見さんなら隠す必要もないと思って、「みえています」と言ったら、「ここだけの話ですが、宮城

さんはコミンテルンの諜報活動のために、日本に来られたそうで、わたくしに手伝ってくれといわれますが、どんなものでしょうか」と言った。わたくしは二度びっくりした。わたくしは諜報活動を軍事スパイと考えたので「そんな仕事は女の人にはできませんから、きっぱりお断わりになってはどうですか」と言った。そうしたら、久津見さんは、「それではお断わりすることにいたしました。しかし、あの絵描きさんは、人間としては大変よい人で、信用のできる人のようですから、お友達としてつきあうのは、よろしいでしょうね」と言った。わたくしも「ひじょうに人柄のよい人です。わたくしは医者对患者として、つきあっていますが、あなたもああいうよい人と、お友達として、おつきあいになるのは、別にさしつかえないでしょう」と言った。(中略)

最後に、わたくしは久津見さんに、小さい声で、「誰があなたに宮城さんを紹介したのですか」とたずねてみた。そうしたら、久津見さんは、「ここだけの話ですが、高倉テルさんがコミンテルンの人だといって紹介してくださいまして、わたくしに宮城さんの仕事を手伝ってくれと言われたのです」と言った。これを聞いて、わたくしは三度びっくりした。高倉テルさんはわたくしの妹の主人であったから、これは大変なことになったと心配した。

久津見は、安田には宮城の諜報活動に協力することを断ると言っていたが、実際には宮城に協力し、宮城の「もとめに応じて、話してあげたり、調べてあげたり」していた(牧瀬編・1975、109頁)。また、久津見自身は農村問題には詳しくなかったために、北海道で農民運動をしていた山名正実を宮城に紹介している(平澤・1987、117～118頁)。宮城は、久津見に「ものの見方、考え方にピリッとした筋がとおり、基本的な線からは一步も退かない勁さ」をみて、「真栄田や高倉にはないものを彼女に感じ、同志というより人間的なしたしみをおぼえ、その魅力にひかれて、それ以後連絡を保ちつづけた」のである(尾崎・1977、244～245頁)。

タカクラは、36年の2・26事件の直前、久津見と宮城が会う段取りをつけたが、自身は待ち合わせ場所には行かなかった。久津見は、そのときのことを、次のように回想している(牧瀬編・1975、107頁)。

あすの晩、一平荘という神楽坂の料理屋へ来てくれ、といって、ちゃんと凶面を書いておいてきました。翌日の晩、行きましたら、宮城さんは来ていましたが、高倉さんは来ない。もと水野十郎左衛門の屋敷跡というので、ずいぶん風格のある家でした。そんな料理屋へ入ったことがないので、わたしは手もち無沙汰でいたんですが、高倉さんはとうとう現われないのです。それが二・二六事件のぼっ発の前夜です。

2・26事件は、知られるように、1936年2月26日に陸軍皇道派の青年将校が起こした反乱事件である。元老・重臣・軍閥・政党を君側の奸として一掃する昭和維新の実現をめざし、歩兵第1、第3連隊、近衛歩兵第3連隊など1400余名を動員、斉藤実内大臣・高橋是清蔵相らを殺害し、永田町・三宅坂一帯を占拠したが、27日に戒厳令が布告され、29日反乱部隊は武装解除され鎮圧された。この事件の背景には、陸軍部内の対立、政党の腐敗、農村の疲弊などがあつた。

2・26事件は、ゾルゲ諜報団にとっても、重大な関心事であつた。ゾルゲは、尾崎秀実、宮城与徳に対して「出来る限りの情報を集める様命じ」、自身もまた「出来る限り見て歩き情報を蒐集し」ていた(石堂・1971、144頁)。久津見は、2・26事件が起きると、「あれは軍部の革新的なものじゃないか」と考えて情報を集めるため、四谷見附からバスに乗り、赤坂見附、銀座へ向かったが、「祝田橋や方々に機関銃が据えつけ」られ、「警視庁までも、いわゆる反乱軍に占領されている」ので、「これでは革命になるかな」という気持ちをいだいたという。当時の行動が怪しまれ、久津見は3月1日に検挙され、四谷署に40日間留置された(牧瀬編・1975、106～108頁)。

タカクラも、軍部と右翼勢力と農村との関係を研究していたときだったので、九段下で産婦人科医院を開業していた太田典礼(8)と一緒に、情報を収集したり、夜の大雪にまぎれて見学に出かけたりした。太田によれば、タカクラは、「ラジオにかじりつき、看護婦の近持喜美子を助手にして情報をとり、震災時のようなテロの危険がある、といい出し、左翼で知られた人は今晚は他の処へ泊るようすすめたので、後から来た村山知義らはみんな用心して家に帰らなかった」という。また、2月28日には、タカクラは、「革命軍が山王ホテルで大演説をやっている。聴きに行こう」と、太田を誘い、

聴きに行っている。幸楽と山王ホテルの前は大勢の人ばかりで熱気をおびていた。帰り道、溜池方面へ歩いて行くと、交渉のため包囲軍とかけ合って通っていく安藤輝三大尉らしい一行を見かけ、「どうやら撃ち合いはないらしいと思って帰った」という(太田・1980、108～111頁)。こうしてタカクラは、「とちゅう、何度となく、歩哨にとがめられたが、現場近くまでもぐりこんで、反乱のもようお、まのあたり、見る事ができた」のである(タカクラ・ツウ・1955、300頁)。

2・26事件後、タカクラは、久津見と会うことはなかった(9)。そして3月31日には、長女の信が神奈川県立平塚高等女学校へ入学することになったため、神奈川県中郡国府村に移住した。家は河崎なつの紹介によるものであった(タカクラ・ツウ・1955、301頁、304頁)。

宮城は、一度、タカクラに貸していた本の返却と社会情勢の話聞くために、神奈川のタカクラの家を訪れている。しかし、宮城によれば「全く私との関係を避けると云ふ態度であった」ため(石堂・1971、392頁)、以後、タカクラと宮城との関係は断たれた(10)。

2. ゾルゲ事件の公表とタカクラの自首

朝日新聞は、1942(昭和17)年5月17日、「国際諜報団検挙さる 内外人五名が首魁」という一面四段見出し記事で、ゾルゲ事件を報道したが、新聞各紙とも発表内容・様式は司法省司法検察による「新聞記事掲載要領」にもとづく厳格な統制の中で報道された(加藤・2019)。16日に司法省から「国際諜報団事件」として発表されるまで、事件は戦時情報統制のもとで秘匿された(加藤・2014、17頁)。

事件関係者の検挙は、41年9月27日に検挙された元アメリカ共産党員の北林トモの検挙に始まり、10月10日に宮城与徳、次いで14日に尾崎秀実(11)、18日にゾルゲ、クラウゼン、ブーケリッチが一斉に検挙された。

このゾルゲ事件の中心メンバーの一人である宮城与徳に情報を提供をしたり、協力者を紹介していた久津見房子も41年10月13日に逮捕された(牧瀬編・1975、126頁)。

タカクラ・テルは、1941年12月26日に革命的ローマ字運動事件第一審判決で、懲役2年、執行猶予5年の判決を受けたあと、42年4月20日に横浜検事局に呼び出され、思想犯保護観察法の適用を言い渡された(山野・2019)。タカクラは真栄田三益の紹介で宮城と会い、協力を求められており、その協力を断ったタカクラは、久津見を宮城に紹介した経緯がある。ゾルゲ事件の取り調べが進んでいることを知ったタカクラは、そろそろ自分の名前が出るころで、検挙されるのは時間の問題だと考えていた。タカクラ・ツウは、自伝草稿の中で、タカクラの気持ちを次のように書いている(タカクラ・ツウ・1955、351～353頁)。

検挙される事が分かっていて、その検挙お待っている気持ぐらい、いやなものわない。しかも、タカクラわ、執行猶予ちゅうの身であるから、こんど、つかまれば、とうぜん、下獄しなければならぬ。その上、事件が事件であるから、はたして、どんな刑お下されるか、まったく想像もつかない。タカクラわ、家族のことお考え、子供たちのことお思っ、自分の取るべき処置について、長いあいだ、まよった。そして、かんがえぬいたあげくに、時期お見て、自首する覚悟おきめた。

そうしているうちに、タカクラの義兄で医師の安田徳太郎も宮城に情報提供をしていたとされ、42年6月8日、青山警察署に検挙された(安田・1976、259頁)。タカクラも、妻で安田の妹のツウも、安田の検挙を「意外」だと思ったが、まだタカクラの名前は出ていないことを知った。

そこでタカクラは、「自首するまえに、家族の生活のために、最大限の仕事おしておこう」と決意し、とりかかったのが、箱根用水の調査であった。約2か月にわたって、箱根、小田原、沼津一帯の調査と文献の研究を進め、箱根用水の輪郭がほぼ明らかになった。そして、これを「小説の材料にしよう」と決心した(タカクラ・ツウ・1955、353～356頁)。

ほぼ調査が終わった7月の中旬ころ、久津見の娘一燈子から、「タカクラさんの名前も出ているから」と伝えられたこともあり、帝国更新会の小林杜人とも相談して警視庁に自首したのである(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)(12)。小林は、タカクラが自首の相談に来たときのことを、次のように回想している(小林・1987、53～54頁)。

昭和一七年も後半期になっていたと思う。日時は正確に覚えていないが、松本[三益]は警視庁から釈放されて帝国更新会思想部に来た。

ところが、今度はつる夫人が警視庁に拘留されて取り調べを受けた。その釈放運動にも行ったが一ヵ月余りで釈放されたと思う。

松本が執行猶予になり、釈放されてから間もないころと思うが、神奈川県二宮町にいた高倉テルが上京して、私に相談に来た。

「ゾルゲ・尾崎事件で久津見房子が検挙されたうえ、安田徳太郎も裁判を受けた。じつは、私もこれにかかわりがあるので、私のことも、もうわかっていることと思う。この際、警視庁に自首したいがどうか」というのである。私もそれに賛成し、その工作を引き受けることにした。そのあとで、「奥の座敷に、あなたと関係のある松本三益がいるから会いなさい」といったら、高倉は驚いていたが、松本と久しぶりに会うと「ここに元凶がいる」と叫んで笑っていた。

私が警視庁に行って「高倉テルが自首したいといっているので連れて来るが、寛大にしてほしい」と申し入れたら「どうせわかっていることだし、その方が有利だ」といわれた。そこで高倉を連れて行ったのだが、このときは二ヵ月ぐらいで釈放されたと思う。

松本(真栄田)三益(13)が釈放されたのは1942年3月26日であった(司法省刑事局・1942、206頁)。松本は、40年7月25日に大阪で警視庁に検挙されたが(14)、その理由は、松本によれば、小林陽之助を中心とした日本共産党再建準備会に関するもので(松本・1974、378頁)、松本は東京に護送されて青山署に1年8か月留置されたあと、起訴留保で保釈され、思想犯保護観察法にかけられたという(守屋・1976、189頁)。そして小林杜人のいる帝国更新会思想部に来ていたのである。

松本の妻・ツルは、1942年8月17日に築地署に検挙されている。ツルによれば、「”ゾルゲ事件”の関係者としての検挙」であったとし、「私はゾルゲ事件とは関係もないし政治活動と諜報活動とは全く違うものだと確信があったので落ちついてた。ただゾルゲの関係者である宮城与徳とは面識がある。宮城は喜屋武保昌氏の沖縄師範学校の同級生で、アメリカから帰ってから時々喜屋武さん宅を訪ねていたらしい。私もそこで一度逢ったことがある。(中略)二度目は喜屋武さんの隣の人と三人で帝展へ行き、いろいろと絵の説明をしてくれた。美術館を出てから、私は先に失礼して帰った。宮城は沖縄の名護の出身なので、名護に店を持っている私の父を見覚えがあるといっていた。ただそれだけのことで私は二ヵ月も築地署に拘留された」と回想している(松本ツル・1995、100～101頁)(15)。

タカクラは、自首を相談するために小林杜人のもとを訪れたとき、松本が帝国更新会にいることに驚いているが、この驚きは、「満洲での事件」(16)との関連で検挙された松本が釈放されていたことにある。「ここに元凶がいる」というのは、タカクラに宮城与徳を紹介したのが松本であったから、松本の顔を見たときそう叫んだと思われる。タカクラは、松本にも相談したが、「三益から、交友関係はない、と言った方がよい」と言われたという(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)。

警視庁に自首したタカクラは、取り調べの中で、宮城与徳を紹介したのは真栄田三益である旨を供述したが、当局はタカクラの供述を取りあげず、「おまえは間違えている、真栄田三益が宮城与徳をおまえに紹介したのではなく、三益の妻の真栄田つるが紹介したのだとどなりつけられ」という。そして、「おかしいことだ」と思ったが、やむをえずこれを認めて調書に拇印を押したのである(安田・1975、204頁、安田・1976、280頁)。

タカクラは、はやくから真栄田三益に対しては不信の念をいだいていたが、この取り調べで、その不信の念をいっそう深めたに違いない。宮城とは交友関係がないことは、「宮城も断られた、と言っているんで、認められ」(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)、40日後の8月末に釈放された(タカクラ・ツウ・1955、357頁)(17)。

3. 真栄田(松本)三益に対する疑惑

タカクラ・テルは、安田徳太郎が宮城与徳と関わるようになってから、「(真栄田)三益に対する不信から、宮城与徳に用心しないといけない」、「ゾルゲ事件は非常に複雑な事件だから、だれも信用できない」と安田に言ったことがあるという(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)。

タカクラが真栄田に対する疑惑をいっそう深めることになったのは、当局が宮城にタカクラを紹介したのは真栄田三益ではなく妻のツルだとしたことである。

事実、宮城与徳「第五回被疑者訊問調書」（石堂編・1971、390～391頁）によれば、宮城は、沖縄師範学校時代の同窓生喜屋武保昌から真栄田三益の妻・ツルを紹介され、そのツルからタカクラを紹介され、昭和11年初め頃にタカクラの自宅を訪問したになっている。「訊問調書」には、次のように書かれている。

十一問 被疑者と高倉輝との関係に付述べよ。

答 昭和十年夏頃新宿白十字喫茶店に同郷の小説家

宮城 聡

の出版記念会が開催された時、私は当時友人であった

東京市役所福利係長

八幡 一郎

に誘われて出席致しましたが、此の時出席者の内に私の沖縄師範学校当時の同窓生

喜屋武 保昌

が居りまして偶然邂逅致しました。当時同人は私立巣鴨高等商業学校の教授を勤めて居りました。其の頃同人宅で、やはり同郷の

真栄田 つる

を

喜屋武 保昌

より紹介されました。同人は嘗つて左翼運動に関係し検挙され又現に夫

真栄田 三益

が刑務所に入所中である事も聞きました。其処で私は

真栄田 つる

に対し「自分は農業問題の研究をやって見たいが誰か之に就いて明るい人が居たら紹介して貰いたい」と依頼致して置きました処、昭和十一年初め頃になって、何処か場所は忘れましたが同人から「小説家で農民問題に明るい高倉輝と云ふ人が最近刑務所から出て来た」と云ふ事を聞かされたので「是非紹介して貰いたい」と頼んで同人に連れられて当時東京市豊島区西巣鴨附近にあった

高倉

の住所を訪問して紹介を受けました。其の時

高倉

と農村文学の話しや、ロシヤ語が堪能であるとか、其他芸術の話などをして、更に農村問題の研究指導をして貰ふ事を約し、更に私の住所を告げ遊びに来る様に話して別れました。

其後同人は当時私の住所東京市滝野川区西ヶ原岡井方に時々訪ねて来ましたが、昭和十一年夏頃神奈川県二宮に移転して以来私が一度訪問しましたが、夫れ以外会って居りません。

渡部富哉は、この「訊問調書」には真栄田三益がスパイであることを当局が隠すために宮城に供述させたもので、多くの虚構が含まれているとしている（渡部・2018、35～45頁）。確かにこの調書からは、次のような矛盾点が指摘できる。

宮城は、「昭和十年夏頃新宿白十字喫茶店に同郷の小説家宮城聡の出版記念会が開催された時」「沖縄師範学校当時の同窓生喜屋武保昌」と会ったとしているが、実際は宮城が1933年10月に横浜港に上陸した直後に喜屋武と連絡しており、喜屋武宅に長期滞在し、真栄田夫妻もしばしば出入りしていた（喜屋武・1998、21頁）。宮城聡の出版記念会が開かれたのは36年1月のことであった（野本・1997、335頁）。

また、宮城は、喜屋武から「同郷の真栄田つる」を紹介され、その真栄田ツルから「昭和十一年初め頃」「農民問題に明るい」タカクラを紹介され、タカクラの自宅を訪問したとされているが、喜屋武が紹介したのは真栄田三益であり、その三益がタカクラを紹介しており、ツルは関係がない。ツルが農民運動の関係でタカクラとつながりがあったことはない。

さらに、宮城は、真栄田ツルから「現に夫真栄田三益が刑務所に入所中である事も聞きました」とあり、ツルが宮城にタカクラを紹介したとされる1936年初めころは、三益は千葉刑務所に在監中であり、辻棲が合う

ようになっているが、実際は千葉刑務所に下獄する 35 年 7 月 13 日以前に三益が宮城にタカクラを紹介している。

では、なぜこのような調書が作られたのか。渡部は、当局による 1933 年の「九州 2・11 事件」やゾルゲ事件の「三益隠し」の秘策だとする(渡部・2018、104～106 頁、43～48 頁)。

九州 2・11 事件とは、福岡県を中心とした九州地方の共産党に対する弾圧事件で、500 名を超える検挙者を出した。その指導者であった西田信春は拷問で虐殺されたが、同じ九州地方委員会再建オルグとして派遣されていた真栄田は検挙直前の 32 年 11 月下旬に帰京し、検挙もされなかったことから当局は、真栄田への疑惑をもたれないように、「農民闘争社事件」で検挙したとしている。そして真栄田が 35 年 7 月に千葉刑務所に収監されたことで、事件関係者からも疑問をいだかれず、事は特高課長毛利基の思惑通りに運んだという。また、真栄田ツルがタカクラを宮城に紹介したとすることによって、宮城グループの組織化に協力した三益の名前をゾルゲ事件関係記録から消去するために特高が偽装したもので、1942 年 8 月に妻・ツルを検挙したのは「三益隠し」のため帳尻を合わせるためであったと指摘している。

安田徳太郎は、42 年 6 月に宮城に情報を提供したとして検挙されたが、その取り調べを受けていたときに、真栄田三益について、担当警部と次のようなやりとりがあったという(安田・1975、194 頁)。

わたしは昭和十七年六月八日に検挙されて、警視庁の警部の高橋与助と警部補の依田哲の取調べを受けました。そのさい、昭和十一年三月に真栄田三益と高倉テルがわたしのところへ来て、宮城与徳がどういう人かと聞いたことを話したら、警部は「君、真栄田をどうして知っているのか」といいました。それでわたしは、真栄田三益は、昭和八年にわたしのところへ来て、わたしのいちばん信頼している大泉兼蔵を往診してくれといわれて、中野のアジトへ数回往診して、それ以来わたしのところへたびたび診察に来るようになりましたと申しましたら、高橋警部は「君は大泉をよく知っているのだね」といいました。そこでわたしはわざと「大泉はかわいそうな男です。共産党のリンチにあったというから」といったら、高橋警部はわたしの口述を筆記している依田警部補の筆をとめました。

その後、手記を書く段になって、安田はわざと真栄田と大泉のこと詳しく書いたら、依田警部補が「いらんことを書くな」と怒鳴って、そのところを破ってしまった。翌日もう一度書いてみたところ、「書くなというのに、なぜ書くのか、しつこい奴だ、いらんことを書くな」と怒って、また破ってしまったという(18)。そしてあるとき高橋警部は、「宮城はおまえだけに、じぶんのやっていることを、細大もらさずしゃべっている。おまえはこの事件についてはいちばんよく知っているはずだ。おまえたちがこそこそやっていることが、特高警察の内偵によって分かったので、昭和一六年三月七日に、緊急勅令で国防保安法が公布されて、それ以来宮城与徳に尾行がついた。それによると、宮城は昭和一六年六月二日の独ソ戦勃発以来、おまえの家に、三日にあげず、行っているのは、おかしい。診察だけではないぞ」と怒鳴った。そのことから安田は、真栄田三益が当局に宮城のことをバラしたのは「昭和一六年のはじめではないか」と推測している(安田・1976、265～266 頁)。

安田の公判は、1944 年 2 月末から始まったが、傍聴は安田の妻とタカクラの 2 人だけが許された裁判であった。そして 3 月 6 日には懲役 2 年、執行猶予 5 年の判決があった(安田・1976、276～277 頁)。

裁判がすんでから、裁判所の控室で、タカクラは安田に、「この事件の取調べ中に、真栄田三益君について、おかしいことはなかったですか」とたずねたとし、そのときのことを安田は、次のように証言している(牧瀬編・1975、203～204 頁)。

そこで、わたしは「昭和十一年の二・二六事件のあとで、あなたと真栄田三益君が、わたしのところへ来て、宮城与徳はどういう人かとたずねたことを供述したら、高橋警部はわたしの口述を筆記している依田警部補の筆をとめて、それ以後手記にこの件を書くと、いらんことを書くなと行って、破りました。変なことだと思っています」といいました。

そうしたら、高倉さんは、「やっぱりそうでしたか。じつは真栄田はあれから千葉の刑務所に下獄して、出所後、大阪で『紡績新聞』をやっていました。ところが、満洲での事件で昭和十六年に検挙さ

れましたが、満洲での事件を助けてもらうために、警視庁のまだ知らない宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引きをしました。これを機会に内偵が進み、昭和十六年十月のゾルゲ、尾崎、宮城の検挙になりました。真栄田はそのまま東京の警察に留置されていましたが、ゾルゲ事件が一段落ついてから、更新会の小林杜人君が身柄を預かって、釈放になりました。ぼくも真栄田君が小林君の更新会の家にいるのでびっくりしたぐらいです(19)。

当局も宮城与徳と真栄田三益の関係を、不問に付するわけにもいかないので、帳尻を合わせるために、真栄田三益の妻の真栄田つるを検挙して、一年ほど留置場にほうりこんでおきました(20)。

宮城与徳をぼくに紹介したのは、ほんとうは真栄田三益でした。ところが、昭和十七年六月にこの件で警視庁に、小林杜人君のつきそいで自首したさい、当局はぼくの供述をどうしてもとりあげず、おまえは間違えている、真栄田三益が宮城与徳をおまえに紹介したのでなく、三益の妻の真栄田つるが紹介したのだとどなりつけられました。おかしいことだと思いましたが、やむなしにこれを認めて、拇印を押しました。これをおぼえておいて下さい」と申しました。

この安田の回想には、タカクラと真栄田三益が安田のもとを訪れたのは1936年の2・26事件後ではなく35年6～7月ごろであること、真栄田が大阪で発行していたのは『紡績新聞』ではなく『紡織時報』であること、真栄田ツルが検挙されて拘留されたのは1年でなく2か月であること、タカクラが自首したのは42年6月ではなく42年7月であること、といくつか記憶違いがある。しかし、この回想の中で重要な部分は、当局がタカクラに宮城与徳を紹介したのは真栄田三益ではなく妻の真栄田ツルであるとし、真栄田三益であったことを認めなかった、また、真栄田三益が「満洲での事件」を助けてもらうために宮城与徳の諜報活動を当局に密告したというタカクラの証言である。

前者については、真栄田三益から宮城与徳を紹介されたことはタカクラ自身が認めている。そして、宮城の「第五回被疑者訊問調書」の供述では、真栄田三益は刑務所に収監中で、妻のツルが、宮城をタカクラに紹介したことになっており、真栄田にはアリバイがあるようになっていることはすでに指摘した。渡部富哉によれば、当局が真栄田三益が宮城を紹介したことを認めなかったのは「三益隠し」の核心であったからだとしている。

問題は後者の証言である。タカクラの言う、真栄田が宮城の諜報活動を密告するかわりに助けてもらったとする「満洲での事件」とは、小林陽之助、岡部隆司をはじめ平賀貞夫、伊東三郎(宮崎巖)、風早八十二、石黒周一らの日本共産党再建準備会の第一グループの事件をさす(小林・1987、75頁)。

1936年7月に帰国した小林陽之助は、野坂参三の命を受けて、コミンテルン第7回大会で決定した反ファシズム人民戦線の方針を日本の共産党に伝え、連絡の途絶えた共産党の現状の正確な調査報告のために日本に送られ、共産党再建をめざしていた岡部や伊東と連絡を取り合っていた。そして、関西方面の活動家であった守屋典郎、真栄田三益らを紹介され、37年5月には真栄田は守屋を通して小林と会っている(渡部・2018、119頁～129頁)。小林は、関西に出向いて活動中、37年12月2日、京都で検挙された(内務省警保局保安課・1938b、35頁)。小林が検挙されたあと、38年3月に守屋、4月に真栄田も京都警察に検挙されたが(内務省警保局保安課・1938a、15頁)、守屋は懲役2年の刑で京都刑務所に下獄したのに対し、真栄田は警察拘留だけで起訴保留となり、思想犯保護観察法に付された(守屋・1976、189頁)。小林が検挙されて身の危険を感じた平賀や伊東らは、第一グループを解体し、伊東は熊本に戻り、平賀は小林杜人と相談し、満州国協和会に就職することになり、38年8月に渡満した(小林・1987、74～75頁)。しかし、その後、平賀は、40年7月11日、小林・岡部らの共産党再建運動と関係があるとして満洲で検挙され、7月25日には大阪で松本(真栄田)が、9月9日には熊本で伊東が検挙された。平賀は、渡満直前に進藤甚四郎・情野義秀と会っていたが、渡満後に再会し、41年4月には岩間義人・田中治・井上林も加わった「天満ホテル会談」で在満日系共産主義運動の統一発展を意図する秘密結社「中核体」が結成されたとされ、これに佐藤大四郎(21)らが指導した北満型合作社運動(いわゆる「浜江コース」)が結びつけられ、41年11月4日、関東憲兵隊による一斉検挙が行われ、情野・岩間・進藤・佐藤ら26名が検挙され、他に「満州国」警察が検挙した25名をあわせ、検挙者は50名を超えた。いわゆる合作社事件である(荻野・2017、229～252頁)。この一連の事件が「満洲での事件」であった。そして、この事件による被検挙者の供述を端緒とし、現実の運動の証拠なしに次々とフレーム・アップされ、満鉄調査部事件(第1次検挙1942年9月21日、第2次検挙43年7月17日)に波及していった(松村・2002、松村・2008)。

新京憲兵隊は、1940年7月の警視庁による協和会中央本部の平賀貞夫検挙を直接的契機に独自の

内偵調査を進めたが、その「偵諜」対象となったのは佐藤大四郎や情野義秀ら農事合作社や協和会の「左翼前歴者」であった(荻野・2017、231頁)。そして、10月13日に情野義秀を公金横領を理由に検挙したが、松村高夫によれば「思想関係の検挙理由や確証なし」の「見込み検挙」であった(松村・2008、450～451頁)。情野が、「浜江コース」を支持する平賀を中心とした6名が「非合法運動」であることを自覚して「中核体」を結成したという供述をしたことから、関東軍司令部の了解を得て、11月4日に一斉検挙を行った。新京憲兵隊では、「中核体」関係者と目された情野ら5名の取り調べを優先的・重点的に進め、42年2月28日には新京憲兵隊長から「中核体」関係者5名が新京高等検察庁に「送致」されている(荻野・2017、234～235頁)。新京高等検察庁での取り調べの過程で、東京拘置所に留置されていた平賀貞夫については、42年3月、新京高等検察庁から東京刑事地方裁判所検察局に対して「共助事件」として取り調べ要請が行われ、同時に新京憲兵隊の松本満貞・中村哲夫らが東京に出張し、取り調べを行った(松村・2008、454頁)。この平賀を取り調べたのはゾルゲ事件担当の思想検事・岡寄格で、1939年から40年にかけて伊藤律を取り調べた検事であり、北林トモ・宮城与徳などゾルゲ事件の事情に精通していた(渡部・2018、146頁)。平賀は、憲兵隊が構想する「在満日系共産主義運動ノ指導体タル中核体」については頑強に否定していたが、平賀に対する拷問が行われ、「中核体」についての具体的な供述が得られたという(松村・2008、454頁、渡部・2018、147頁)(22)。荻野富士夫によれば、平賀を含む6名の「手記」や「訊問調書」から浮かびあがる「中核体」の実態は茫漠としたもので、しかも重要な部分でくいちがひがあり、それは『中核体』の存在自体が虚構の産物であったことを推測させるものであった(荻野・2017、248～249頁)。

平賀が合作社事件で取り調べを受けたのち、42年8月17日に松本三益の妻・ツルが検挙されたが、三益は、そのときのことを、次のように回想している(松本・1974、379頁)。

警視庁はあきらめきれずわたしを釈放してからこんどはゾルゲ事件の宮城与徳の関係にからませて妻を検挙し、同年十月まで一日おきにわたしを警視庁に呼び出し、「本当のことを言えば妻をすぐ帰すとか、「お前が言わなくても証拠が揃ったからいま逮捕できる」などとおどしたり、身体の弱い妻を人質にしての卑怯な取調べをおこないました。

松本三益は、妻のツルが検挙されてから10月まで1日おきに警視庁で取り調べを受けたことを記している。その取り調べの内容はツルに関する訊問のように読めるが、ゾルゲ事件に関連してツルが宮城与徳の依頼を受けて農民運動の活動家を組織したことはなく、ツルには供述すべきものは何もない。三益に宮城関連のことを聞くのであれば、半年前まで留置されていたのであるから、特高は留置しているときに聞いているはずである。そうだとすれば、10月まで呼び出しを受けたのは、渡部富哉も指摘しているように、平賀貞夫の「満洲での事件」、すなわち合作社事件、共産党再建運動に関することであったと考えられる。渡部は、「これは真栄田三益の釈放後、『満洲の事件』が関東憲兵隊によってでっちあげられ、既に検挙されている平賀貞夫に対して関東憲兵隊による訊問が行われ、その関係で平賀貞夫の入党推薦者として古くから関係の深かった三益に平賀貞夫の供述の裏付けが必要になったからだ」と述べている(渡部・2018、49頁、148頁)。

タカクラが安田徳太郎に語ったところの、松本(真栄田)は「満洲での事件を助けてもらうために、警視庁のまだ知らない宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引きしました」という「満洲での事件」とは、この平賀が関わった事件、すなわち小林陽之助関連の共産党再建準備会事件や合作社事件のことを指している。松本も同様に認識しており、「警視庁が、日本共産党再建準備会事件として一九四〇年(昭和十五年)六月から九月にかけての満洲をふくむ全国一斉検挙のときにも犠牲を最小限にいとめ、『組織』と『人的資源』を温存することができました」と記している(松本・1974、377頁)。ただし、松本が記している「組織」と「人的資源」は温存されたというような状況にはなく、実際は岡部隆司、平賀貞夫、伊東三郎をはじめ共産党再建運動グループの活動家たちは根こそぎ検挙されていた。

それでは、タカクラは、平賀らの「満洲での事件」をどのように知ったのか。渡部は、「高倉や守屋典郎は平賀貞夫と全農全会派の活動をとおして知り合っていたし、伊東三郎も農民部長として深い関係があった。だから高倉は平賀貞夫の検挙と三益の関係を知っていたのだ」と指摘している(渡部・2018、148頁)。確かにタカクラは、別所温泉時代、西塩田小作争議を指導し、全農上小地区委員会の結成に関わっており(上小農民運動史刊行会編・1985、155頁～159頁)、伊東三郎や守屋典郎とも知り合っていた。ただ平賀貞夫とは具体的にいつごろどこで知り合ったかを裏付ける史料・証言

はなく、平賀が検挙直前の 1940 年 4 月から 5 月にかけて帰国したときも、岡部隆司、風早八十二のほか、山本秋、橘樸、宮内勇、磐若豊(埴谷雄高)、遠坂良一、松本三益らとは会っているが(平賀貞夫「第三回聴取書」「手記」、「合作社事件」研究会編・2009、270～272 頁、277～282 頁)、タカクラの名前はない。また、松本三益が「宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引き」をしたという情報をタカクラがいつごろどこで入手したのか、それを裏付ける史料・証言もない。渡部も「農民運動関係の事情に詳しい高倉は他の全農全会派の関係者から」平賀の「情報を得ていたのであろう」との推測にとどまっている(渡部・2018、51 頁)(23)。したがってタカクラの証言を裏付ける史料・証言は発見されていない現状がある。とはいえ、松本は、満洲での平賀の活動を知っていたこと、宮城を取り調べた河野啓警部補が松本から情報を得ていたことが推測されること(24)、また、1938 年 3 月の検挙では思想犯保護観察で保釈されており、40 年 7 月の検挙では本来なら起訴されて当然なのに再び思想犯保護観察で保釈となっており、その処分は不自然であることなどから、40 年 7 月に検挙されたときに松本が、「宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引き」をした可能性は高いと考えられる。

おわりに

本稿では、タカクラ・テルとゾルゲ事件との関わりを跡づけるとともに、真栄田(松本)三益が宮城与徳の諜報活動を当局に密告したというタカクラの証言に関連する真栄田の疑惑について検証した。

タカクラは、1935 年、ゾルゲ事件の中心人物の一人である宮城を真栄田から紹介され協力を依頼されたが、宮城に信頼を置くことができず、宮城とは距離を置き、代わりに久津見房子を宮城に紹介した。1942 年、タカクラの義兄・安田徳太郎が宮城の協力者となっていたために検挙されると、タカクラは帝国更新会の小林杜人に相談して警視庁に自首し、40 日後に釈放された。

タカクラは、はやくから真栄田に対する不信の念をいだいていたが、取り調べの中で、宮城を紹介したのは真栄田である旨を供述したにもかかわらず、当局はタカクラの供述を取りあげず、タカクラに宮城を紹介したのは真栄田三益ではなく妻のツルであるとし、三益であったことを認めなかった。タカクラは真栄田への疑惑を深めた。ツルがタカクラに宮城を紹介したとしたのは、真栄田をゾルゲ事件関係の記録から消去するための特高の偽装であった。また、真栄田三益が「満洲での事件」を助けてもらうために宮城与徳の諜報活動を当局に密告したというタカクラの証言については、その信憑性が高いことを検証した。

タカクラのゾルゲ事件に関する資料・証言は限られており、不明な部分に関しての解明は今後の課題としたい。

注記

- (1) 松本三益はのちに、安田徳太郎の「聞き書き」について、「高倉テル氏の話としてわたしがゾルゲグループの宮城与徳を密告したとの中傷記事があった」とし、「自由法曹団の松井繁明弁護士、坂本修弁護士、守屋典郎弁護士連名で取り消しを要求したが返事がなかった」、「守屋同志の『文化評論』の別刷りを安田に送って取り消しをもとめたが返事がなかった。安田を名誉毀損で告訴しなかったのは裁判が長期化して党務に支障を来すおそれがあり、守屋弁護士が『文化評論』の記事で安田デッチ上げ反共宣伝は一応粉砕できたと考えた結果と思うが、やはり告訴して彼を法廷で暴露すべきだったと悔やまれてならない」と書いている(松本・1994、62～64 頁)。
- (2) 真栄田三益が宮城与徳の諜報活動を当局に密告しゾルゲ事件の端緒をつくったのではないかという疑惑については、1949 年 2 月に「ウイロビー報告書」による「伊藤律ゾルゲ事件端緒説」が発表されてから 4 年後、53 年 6 月に広西元信が「松本三益は公安当局のスパイか？」(『日本週報』第 250 号、1953 年 6 月 25 日)で、松本が「ゾルゲ事件に深い接触を持ちながら、ウイロビー報告＝警視庁報告にぜんぜん名を列記されていないことは、松本が疑われている最大の理由である」とし、安田徳太郎らの証言をもとに、その疑惑を指摘していたが(広西・1953、30～31 頁)、その後深く検討されることはなかった。尾崎秀樹は、「真栄田三益に対する疑惑は、戦後も早くからあった。真栄田は松本三益の名前で党の要職についていたが、彼への疑惑は一部にくすぶりつづけ、関係者の間でささやかれていた。しかし事柄が事柄だけに直接たずわけにもゆかず、見過ごされてきたのだ」と書いているが(尾崎・1977、242～243 頁)、「伊藤律ゾルゲ

事件端緒説」に立っていたためか、その真相を究明することはなかった。

- (3) タカクラ・テルが宮城与徳と知り合ったのは、渡部富哉は「1935年初め」としているが(渡部・2018、40頁)、守屋典郎によれば「(昭和)十年五月ごろ思いがけず真栄田君が大阪に来た。彼の母が危篤になったので彼は一審判決後三月に保釈となり、郷里の沖縄に帰って五月控訴裁判をうけるため上京する途中だということであった」とあり(守屋・1976、188頁)、35年5月ごろの可能性が高い。
- (4) 高倉が宮城と知り合ったのは真栄田三益の紹介によることは、タカクラが「松本三益の紹介で来た。アメリカから帰った画家と言ってきた。私も興味をもって会った」と証言している(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)。
- なお、渡部は、2013年2月14日作成の山野「タカクラ・テル(高倉輝)年譜」で、「1936年」の項で「真栄田つるの紹介で宮城与徳が訪ねてくる」と記載したことがあったことに対して、渡部の指摘や高倉太郎氏の訂正表をもとに、2015年11月17日作成の「年譜」で「1935年」の項に「この年、のちのゾルゲ事件の関係者、宮城与徳と会う」と訂正したにもかかわらず、渡部は「訂正はされていない」「研究者としてあるまじき破廉恥な盗作」だと批難している(渡部・2018、31～32頁)。この渡部の批難に対する反論は別稿(山野・2018)を参照のこと。また、最新版「タカクラ・テル(高倉輝)年譜」(山野・2019)を参照のこと。渡部は、写真図版で紹介している「タカクラ・テル年譜(略歴)」について「高倉自筆」としているが(渡部・2018、12頁、44頁)、タカクラの自筆ではなく、この年譜はタカクラからの聞き取りなどをもとに高倉太郎氏が作成したものである。
- (5) 高倉太郎は、1935年当時、小学4年生だったが、「わが家にめずらしい高級なチョコレートや子どものおもちゃのオートバイ、モーターボートを次々と持ってくる人がいる。その人があとから考えると宮城与徳だと思う」と語っている(高倉太郎氏より聴取、1987年12月23日)。
- (6) 安田徳太郎は、タカクラ・テルが真栄田三益を連れて訪れたのは「二・二六事件がおさまった三月中頃」としているが(安田・1976、244頁)、1936年3月は真栄田は千葉刑務所に収監中であり(守屋・1976、188頁)、記憶違いである。真栄田は「昭和十年六月から七月に、入獄のまえ安田氏に招待されて高倉氏と一緒に訪ね昼食をご馳走になったことがある」としており(守屋・1976、191頁)、その頃の可能性が高い。
- (7) 渡部富哉は、この安田徳太郎の証言を(『暦』「安田徳太郎氏聞き書き」194頁)と注記し、文章を改変して引用しているが(渡部・2018、35頁)、『思い出す人びと』からの引用の誤りである。「安田徳太郎氏聞き書き」の方は、次のような証言になっている(牧瀬編・1975、194頁)。
- 「それからしばらくして、高倉さんが真栄田三益をつれてやってきました。真栄田三益が『宮城与徳という絵かきが来ているはずですよ』と申したので、『来ています』と申しましたら、『あなたのことをほめていました』ともうしました。『わたしのところへは、患者として来ていますが、どういう人ですか?』と聞きましたら『コミンテルンと違った別の組織らしい』と申しました。わたしは『じぶんは患者として診ていただけだから、そういうことはどうでもよいが、あなたがたはハラをきめねばならないですね』と申しましたら、真栄田は『警視庁はもう知っているらしい』と申しました。高倉さんは初めからしまいまで、一言もものをいわず、だまっていました。そのとき以来、高倉さんはわたしの家へ全然よりつかなくなりました。」
- (8) 太田典礼は、避妊具太田リングを発明した医師として知られるが、1934年に東京・信濃町に産婦人科医院を開いた。医院は35年に九段下に移転、このころからタカクラ・テルも太田の医院に集まるようになり、36年1月には「真面目な性科学の確立と普及を目的」に雑誌『性科学研究』を創刊したが、創刊号にはタカクラや安田徳太郎も執筆している(太田・1980、106～107頁)。
- (9) 松本三益は、1933年4月1日、全国農民組合全国会議大会準備会議に出席した共産党員グループに対する検挙、いわゆる「農民闘争社事件」で検挙され、大審院で懲役2年の判決があり(松本・1988、54頁)、1935年7月13日から36年9月23日まで千葉刑務所に収監された(守屋・1976、188頁)。釈放後、真栄田は、大阪の義兄が経営していた『紡織時報』を引き継ぐことになり、37年1月に大阪に移住する(松本・1988、54頁、松本ツル・1995、88頁)。久津見房子は、タカクラ・テルを通して真栄田と会う機会があり、宮城与徳の仕事をやめて、大阪で『紡織時報』の仕事を手伝うように依頼されたが、断っている(牧瀬編・1975、111～112頁)。このときのことを久津見は、「わたしの留守に高倉さんの紙切れが置いてあって、『池袋のおろろんという飲み屋に来てくれ』というので、行きますと、『あわもりの店おろろん』と書いてある小さいお店でした。そこへ真栄田さんが来て、この店はせまいので近くのレストランに行きました」と回想している(牧瀬編・1975、111頁)。タカクラは久津見と会うことはなかった。

- (10) 安田徳太郎によれば、1936年の夏に宮城与徳が安田のもとを訪れたとき、タカクラ・テルについて、『『あのお方は先生の妹さんのご主人だそうですね。わたくしは高倉さんに農業問題の調査をお願いしましたが、おカネばかり要求されて、ちっとも仕事をしていただけません。西が原から大磯に移転されましたので、この間一度おうかがいしましたが、テニスに行くといっって、断われました』と、はじめて高倉さんの名前を口にした』と、宮城が話したという(安田・1976、245～246頁)。
- なお、宮城は、タカクラに渡した金銭について、「仕事に協力させるために二、三十円位づつ数回渡して居りますが、全部では七、八十円位」と供述しているが(石堂・1971、392頁)、タカクラ・ツウによれば、「宮城さんには六十円の借金があった」とし、1942年8月のタカクラの出獄後、タカクラは、60円を刑務所内の宮城に送ったという(タカクラ・ツウ・1955、357頁)。
- (11) 尾崎秀実が検挙されたのは1941年10月15日が定説となっており、加藤哲郎も41年10月15日検挙としている(加藤・2014、11頁)。渡部富哉は10月14日検挙説をとり、榎野亮一が渡部の10月14日検挙説を批判した(榎野・2018)ことに対して反論をしている(渡部・2019)。ここでは渡部説に従う。
- (12) タカクラ・ツウの自伝草稿によれば、7月に「横浜の保護観察所に出頭」となっている(タカクラ・ツウ・1955、356頁)が、タカクラ・テルは「警視庁に行った」と証言している(タカクラ・テル氏より聴取、1980年11月22日)。なお、渡部富哉は、安田徳太郎が検挙された6月8日と同じ日にタカクラは自首したとしているが(渡部・2018、29頁)、誤りである。
- (13) 真栄田三益は1938年7月に松本姓に旧姓復帰している(松本・1988、55頁)。
- (14) 小林杜人は、40年7月に松本三益が検挙されたとき、ゾルゲ事件関連で検挙されたと認識していて、「この事件(注、ゾルゲ事件—引用者)が進行するにつれ、大阪から松本三益が警視庁に検挙されて来た。当時、紡績時報社を運営していたと思う。／そのころ大阪には、思想事件に連座して出所した人びとの相互援助の団体として、大阪誠明会という組織があった。その中心的な活動をしていた大橋静市の紹介状を持って、松本つる夫人が私を訪ねてきた。それ以来、松本三益の釈放方を何回となく警視庁へ頼みに行った」と書いている(小林・1987、51～52頁)。
- (15) 宮城晴美は、松本ツルが1942年8月17日に検挙されて釈放されるまで2か月としているが(宮城・1997、370頁)、渡部富哉は1か月としている(渡部・2018、48頁)。
- (16) 「満洲での事件」とは、小林杜人によれば、平賀貞夫をはじめ風早八十二、伊東三郎(宮崎巖)、岡部隆司らが中心の事件で、1937年7月にコミンテルンから帰国した小林陽之助を中心とした日本共産党再建準備会の「第一のグループ」の事件をさす(小林・1987、75頁)。特高の宮下弘は、党再建「準備会は、昭和十一年(一九三六年)末に、岡部隆司、風早八十二、宮崎巖、平賀貞夫などを中核に、翌年にはこれとは別に党再建をはかっていた長谷川浩、伊藤律らのグループを吸収します。(中略)昭和十三年(一九三八年)、共産主義者団が一斉検挙にあい、小林陽之助も大阪で検挙されたので、危険を感じた宮崎、平賀らは、グループを解いて分散します。／あとからになってからのことですが、平賀ら何人かが満洲に逃げていることがわかって向こうへ手配したのも、けつこう大がかりな逮捕劇になりましたよ。満洲共産党事件といいましたか」と語っている(宮下・1978、169頁)。
- (17) 久津見房子は、小林杜人が東京拘置所に来たとき、「高倉さんのことはご心配なさいますな。わたしがつきそって警視庁に自首して出て、一日で始末書を書いて、それで片づきました」と言ったとし、それを受けて「高倉さんはわたしをゾルゲ事件に結びつけた人」であるにもかかわらず、「その高倉さんが始末書一枚で一日で釈放されているのです」語っているが(牧瀬編・1975、133～134頁)、誤りである。
- (18) 安田徳太郎は、「安田徳太郎氏聞き書き」の方では、「取調べの調書に、真栄田三益の名前をどうしてものせないの、この事件には真栄田がおかしいのではないかと思って、その後の手記を書くときに、わざと真栄田と高倉がたずねてきたことを書きましたら、依田警部補がおこって、『いらんことを書くな!』といっって、手記を破ってしまいました」と真栄田三益に対する疑惑を記している(牧瀬編・1975、191頁)。
- (19) 小林杜人は、安田徳太郎の「聞き書き」にある「更新会の小林杜人君が身柄を預かって、釈放になりました。ぼくも真栄田君が小林君の更新会の家にいるのでびっくりしたぐらいです」とのタカクラ・テルの証言について、松本三益の名誉毀損裁判のために守屋典郎から求められたさい、「そのような事実はありません」との口述書を提出したが(守屋・1976、193頁)、小林自身の回想は、タカクラが自首するために

小林の帝国更新会を訪れたときのことを、「『奥の座敷に、あなたと関係のある松本三益がいるから会いなさい』といったら、高倉は驚いていたが、松本と久しぶりに会うと『ここに元凶がいる』と叫んで笑っていた」と記しており(小林・1987、53～54頁)、「聞き書き」のタカクラの証言と符合する。なお、渡部富哉は、守屋が『文化評論』に掲載した小林の「そのような事実はありません」の口述書には、「『年月日』とあるだけで何月、何日かの記載がない。『印』とあるが、押印された痕跡はない」としている(渡部・2018、33頁)、『文化評論』掲載の文書には「昭和五十年八月二十六日。武蔵野市桜堤三一六一七。小林杜人◎」と年月日の記載がある(守屋・1976、193頁)。

- (20) 松本三益の妻・ツルが検挙されたのは、宮城与徳に協力者を紹介した人物として三益の代わりに検挙されたもので、「真栄田(松本)三益隠し」(渡部富哉)のためであった。ゾルゲ事件の取り調べ状況をまとめた「国際共産党対日諜報機関並之に関連せる治安維持法、国防保安法及軍機密保護法等違反被疑事件取調状況」や「検挙者名簿」(『特高月報』1942年8月分)には、松本三益の名前の記載はないが、松本ツルの名前の記載もない。松本ツルの名前は、「治安維持法違反検挙者調」の一覧表の中に旧姓の「平良ツル」の名前で記載され、ゾルゲ事件とは無関係かのような扱いになっている(内務省警保局保安課・1942、173頁)。これは明らかに当局の意図的な記載の仕方といえる。
- (21) 山本秀夫は、佐藤大四郎の貧農中心の合作社運動の思想的立場について、橘樸の農村協同組合論をもとに、より「貧農に重点をおく方向に尖鋭化していったもので、タカクラ・テルの『大原幽学伝』や小説『大原幽学』に感動し、幽学の行動が佐藤の「運動への挺身の大きな支え」となっていたことを指摘している(山本・1974、10～11頁)。佐藤は、『『大原幽学』を読む』という一文の中で、1939年の夏に中野の橘を訪ねたとき、タカクラの『大原幽学伝』を示され、その遺蹟を訪ねることをすすめられたこと、そして、そのまま満洲に帰ったが、ただちに『大原幽学伝』を求めて一読し、「自分が千葉県長部に程遠からぬ地に故郷を持ってゐるのに未だ知ることのなかった、此の偉大な農民組織者の生涯と其の事業を読み、心からの感動を覚えた」と記している。その後佐藤は、41年にタカクラの『大原幽学』を通読したときには、「私は再び感動を新たにし、さきの伝記を通読した所の記憶を辿りつゝ、いつしか大原幽学と、その父、その友、長部の農民達との交渉の件り等に至って、屢々涙を流さずには居られなかった」と記している(佐藤・1941、29頁)。佐藤の合作社運動の根底には、たんなる公式的な共産主義運動の立場ではなく、タカクラが大原幽学の農村改革にみたように、タカクラの農村共同組合論に通じるものがあつたように思われる。
- (22) 渡部富哉によれば、このときの関東憲兵隊から派遣された検察当局による拷問のすえに平賀貞夫は1945年に獄死した(渡部・2018、150頁)。
- (23) なお、佐藤正は、「満洲での事件を助けてもらうために、警視庁のまだ知らない宮城与徳の諜報活動を密告して、当局と取り引きをしました」という証言について、「安田徳太郎や高倉テルの体験に基いた話ではない。十分な根拠のある推論でもない。根拠の乏しい推測である」とし、「判断から除外」したほうがよい、としている(佐藤・2004、93～94頁)。
- (24) ゾルゲ事件で宮城与徳を取り調べた警視庁特高一課の警部補・河野啓の「褒賞上申書」(内務省警補局内部資料、特高部長・警保局長「特高課員の褒賞上申について」)には、宮城の個人的な知人を取り調べた河野は、宮城の身近な人やその日常生活に関する情報を補足的に証明させ、それによって自分の有罪を断固として否認する宮城を自供に追い込んだ」とある(白井編・2003、104頁)。河野が取り調べた宮城の「個人的な知人」とは誰なのか、具体的な記載はないが、喜屋武保昌は1939年11月に死去しており、考えられる人物は、渡部富哉も指摘(渡部・2018、55頁)しているように、宮城と同郷で、宮城から農業・農民問題に詳しい人物の紹介を依頼された真栄田三益をおいて他にいない。当局が松本から宮城の情報を得ていたことを示す史料といえる。

引用・参考文献

- 石堂清倫編 1971 『ゾルゲ事件』第4巻(現代史資料24、みすず書房、1971年)。
太田典礼 1980 『反骨医師の人生』(現代評論社、1980年)。
沖浦和光 2015 『部落史の先駆者・高橋貞樹—青春の光芒—』(筑摩書房、2015年)。
荻野富士夫 2017 『『合作社事件』から『満鉄調査部事件』へ—『在満日系共産主義運動』弾圧における『中核体』をめぐる—』(荻野富士夫・兒嶋俊郎・江田憲治・松村高夫『満州国』における抵抗と弾圧—関東憲兵隊と『合作社事件』—』日本経済評論社、2017年)。

- 尾崎秀樹 1977 『越境者たち—ゾルゲ事件の人びと—』(文芸春秋、1977年)。
「合作社事件」研究会編 2009 『「合作社事件」関係資料』(十五年戦争極秘資料集補巻34、不二出版、2009年)。
- 加藤哲郎 2014 『ゾルゲ事件—覆された神話—』(平凡社新書、2014年)。
加藤哲郎 2019 「ゾルゲ事件研究の新段階—思想検事・太田耐造と特高警察・天皇上奏・報道統制—」(第29回諜報研究会報告資料、2019年11月9日、
<http://www.npointelligence.com/NPO-Intelligence/study/諜報研究報告20191109s.pdf>。2019年12月7日閲覧)。
- 喜屋武由放 1998 「宮城与徳のこと」(『ゾルゲ事件研究』第4号、1998年)。
佐藤大四郎 1941 『「大原幽学」を読む』(『満洲評論』第20巻第10号、1941年3月8日)。
佐藤正 2004 『日本共産主義運動の歴史的教訓としての野坂参三と宮本顕治—真実は隠しとおせない—』(上、新生出版、2004年)。
- 司法省刑事局 1942 『思想月報』(第93号、1942年4月)。
上小農民運動史刊行会編 1985 『長野県上小地方農民運動史』(上小農民運動史刊行会、1985年)。
白井久也編 2003 『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』(社会評論社、2003年)。
タカクラ・ツウ 1955 『私の歩いてきた道(自伝草稿)』(1955年)。
高橋貞樹 1968 『特殊部落一千年史』(近代文芸資料復刻版叢書第7集、世界文庫、1968年)。
内務省警保局保安課 1938a 『特高外事月報』(1938年5月分)。
内務省警保局保安課 1938b 『特高月報』(1938年12月分)。
内務省警保局保安課 1942 『特高月報』(1942年8月分)。
- 野本一平 1997 『宮城与徳—移民青年画家の光と影—』(沖縄タイムス社、1997)。
平澤是曠 1987 『汚名—ゾルゲ事件と北海道人—』(北海道新聞社、1987年)。
広西元信 1953 「松本三益は公安当局のスパイか？」(『日本週報』第250号、1953年6月25日)。
牧瀬菊枝編 1975 『久津見房子の暦—明治社会主義からゾルゲ事件へ—』(思想の科学社、1975年)。
槇野亮一 2018 「孫崎享著『日米開戦へのスパイ「東条英機とゾルゲ事件」』」(『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』No.50、2018年4月)。
- 松村高夫 2002 「フレーム・アップとしての満鉄調査部弾圧事件(1942・43年)」(『三田学会雑誌』第95巻第1号、2002年)。
松村高夫 2008 「フレーム・アップと『抵抗』—満鉄調査部事件—」(松村高夫・柳沢遊・江田憲治編『満鉄の調査と研究—その「神話」と実像—』(青木書店、2008年)。
- 松本三益 1974 「追憶」(渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編『たかく遠くの方へ—遺稿と追憶—』土筆社、1974年)。
松本三益 1988 『写真でつづる松本三益のあゆみ—年譜、著書・論文目録、資料—』(松本三益生年85歳記念、自費出版、1988年)。
松本三益 1994 『自叙』(自叙—松本三益刊行会、非売品、1994年)。
松本ツル 1995 『回想と随想』(非売品、1995年)。
宮城晴美 1997 「松本ツル」(『近代日本社会運動人物大事典』第4巻、日外アソシエーツ、1997年)。
宮下弘 1978 『特高の回想—ある時代の証言—』(田畑書店、1978年)。
守屋典郎 1976 「『聞き書き』と戦前史の真実—安田徳太郎氏のあやまりを正す!—」(『文化評論』1976年6月号)。
- 安田徳太郎 1975 「安田徳太郎氏聞き書き」(牧瀬菊枝編『久津見房子の暦—明治社会主義からゾルゲ事件へ—』思想の科学社、1975年)。
安田徳太郎 1976 『思い出す人びと』(青土社、1976年)。
山野晴雄 2018 「渡部富哉氏による『タカクラ・テル(高倉輝)年譜』(2013年2月14日作成)を『盗作』と公表したことに対する反論」(2018年7月22日、<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/watabetomiya-hanron.pdf>)。
- 山野晴雄 2019 「最新版 タカクラ・テル(高倉輝)年譜」(2019年12月10日作成、<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/saishin-takakuranenpu.pdf>)。
- 山本秀夫 1974 「橘僕を継ぐもの—佐藤大四郎—」(『龍溪』第11・12合併号、1974年12月)。
渡部富哉 2017 「2・26事件とゾルゲ事件—岐阜の人々—安藤輝三・尾崎秀実・伊藤律—」(『ゾル

ゲ事件関係外国語文献翻訳集』No.49、2017年7月)。

渡部富哉 2018 『解明されたゾルゲ事件の端緒－日本共産党元顧問真栄田(松本)三益の疑惑を追って－』(社会運動資料センター、2018年)。

渡部富哉 2019 「反論『尾崎秀実の14日逮捕は誤りか－『太田耐造資料』からゾルゲ事件端緒説を追う－』(その1～その5、2019年12月3日～12月7日、ちきゅう座スタディールーム、
<http://chikyuz.net/archives/99337,99376,99424,99487,99492>、2019年12月8日閲覧)。

(2020年1月20日脱稿)

* 山野晴雄のホームページは、2020年5月23日、http://www7b.biglobe.ne.jp/~ningen_ikiru/から
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu>に移行した。(2020年5月24日)